



ベトナム・ツアー



出発前のワークショップ

一般の観光ツアーとスタディツアーとはその国の表通りと裏通りほどの違いがある。スタディツアーはNGO(非政府組織)などが支援している国の視察や交流を目的にし、しばしばホームステイをする。確かにホームステイは現地の人の生活はわかるが、言葉も通じないままジェスチャーだけでは疲れてしまうというのが本音だ。昨年九月のベトナム・スタディツアーは幸いホテル利用の五泊六日の旅。観光はあまりなく、支援施設訪問が中心だった。一方、今年二月の旅

は一般の観光ツアー。ホテルも高級で世界遺産見物の表通りの旅で同じ国でも受けた印象は全く違った。ベトナム・スタディツアーは山口県内のNGOで作っているNGOネットワーク山口の主催で、ベトナムへ医療器具や車いすを贈る運動をしている国際医療協力山口の会(IMAYA)の支援先を訪問した。



孤児院に届けるぬいぐるみ

参加者はIMAYA会長の岩本功さん(周南記念病院名誉院長)、ほかのNGO関係者四人、女子大生四人、大学教授一人計十人。現地ではNGOシャナンテイ山口のモン族のスタッフも参加した。これまで参加したスタディツアーはタイ北部のモン族支援の旅、韓国カトリック教会との交流の旅、フィリピン・ルソン島北部のイ

フガオ族教育資金支援の旅、カンボジアの貧しい人たちを支援する旅で、今回のベトナムが五回目になる。ネットワーク山口のスタディツアーはとにかくまじめで、出発前に「援助する側とされる側」をテーマに三回のワークショップもあり、帰国後も報告集会を開いた。私のようないい加減な者には多少重荷になったが、一般観光ツアーでは体験できない旅だった。

特に今回は山口大学一人、山口県立大学三人と女子大生が四人も参加した。しかも県立大学生の担当教授、国際文化学部

の岩野雅子さんも参加され、地域学習の授業となった。これではまじめにならざるをえない。しかし驚いたのは帰国報告会に女子大生四人がベトナムの民族衣装のアオザイを着て参加したことだった。やはり女性である。ベトナム戦争が終わって三十年以上が過ぎ、表面的には戦争を全く感じさせないが、裏通りにはまだ戦争の後遺症が色濃く残っている。(元山口放送取締役ラジオ局長)



アオザイ姿の女子大生たち